

* 「竜の涙」のお話

ハワイ・マウナケアでの思い出をひとつ、「竜の涙」のお話です。

私は、大型光学赤外線望遠鏡「すばる」の建設期の8年間(1994~2002年)をハワイで過ごしました。この間いろいろな経験をしましたが、その中でも思いで深いものの一つです。ハワイ諸島は太平洋プレートの穴からマグマが吹き上げて形成されたと考えられています。そしてそのプレートは西に向かって流れており、次々と新しい島を誕生させています。東端にあるハワイ島が最も新しい島で、ハワイ島の東にはすでに次の島が誕生しつつあります。この「竜の涙」がハワイ島の誕生と関係するのかは知りません。

下の写真1は、飛行機の窓から眺めた雪を少しかぶったマウナケア山頂の様子です。マウナケアはこのように噴火丘があちこちに残った火山なのです。



写真1 飛行機の窓から見た雪をかぶったマウナケア

ハワイ・マウナケア(標高4205m)に登るにはハレポハクという標高2800mの地点(ハワイ大学を中心とするマウナケアに存在する天文台の宿泊施設、ビジターセンターがある場所)で30分以上高所順応の休憩を取ることになっています。私は人一倍体が頑丈にできていることもあり、また長く山頂に登っているので、この休憩は取らないことが多かったのですが、理不尽な処分を受けたことで、山麓施設を出た時間と山頂についた時間を監視されるという事態になり、途中で時間をつぶしていた時期がありました。この理不尽な処分については別の機会があると思います。

この山頂への途中で道草を強制されていた時期に、山頂域にたくさんあるシンダーコーンと呼ばれる噴火丘(噴石丘ともいいます)を踏破することを試みていました。あまり見栄えのよくない噴火丘のひとつに登ったとき、その山頂で見つけたものに「竜の涙」と名づけて持ち帰りました。シンダーコーンといわれる噴火丘は3歩登っては2歩ずり落ちるというようなもろい砂利のような火山灰で

すから、頂上に登るのは大変なのです。そんなシンダーコーンの頂上に、それはシンダーの間にひっそりとあったのです。

下の写真2は、マウナケア山頂域から北東に連なるシンダーコーンです。



写真2 噴火丘(噴石丘)が連なるマウナケア山頂域

このようにマウナケア山頂は雨がほとんど降らないので噴火丘は昔の姿をとどめています。下の写真は、山頂に登る途中、山頂のシンダーコーンの方向を眺めたものです。「竜の涙」があったのはこの写真3の右手前の形が崩れたシンダーコーンの山頂です。



写真3 マウナケア山頂近くのシンダーコーン

この写真の中央の丘、右肩に白い点が見える丘がマウナケア山頂のシンダーコーンです。白い点は CFHT のドームです。

そして下の写真4が、この右手前のシンダーコーンの山頂にあった「竜の涙」です。



写真 4 噴火丘頂上のシンダーの中にあつた「竜の涙」

皆さんはこの完全な球体で透明な水晶玉もどきのものをなんと見るかはわかりませんが、人など登るとは思えないシンダーコーンの頂上の岩陰にあつたのです。荒涼としたシンダーが広がるのみの岩陰のものを見つけたこと自体が不思議と思えることでした。

さて、これを手に入れてから時間が経過して、果たしてこの水晶玉もどきものはいったい何なのかという興味もわいてきました。2007年1月に沖縄旅行をしました。沖縄はガラス工芸が盛んで、ツアー旅行だったので、そのガラス工場と売店に連れて行かれました。その際、大きな水晶玉を売っていたので欲しいという衝動に駆られたのですが、値段が値段だったので躊躇してしまいました。沖縄から帰って、水晶玉とガラス玉の見分け方を調べていたら、水晶玉を売っているサイトに入り込んでしまい、まがい物でも我慢できる値段で鑑定書付の直径10cmの水晶玉をみつけてそれを買いました。そしてついでに、水晶玉とガラス玉を見分ける偏光板も買ってしまいました。その記事によると、2枚の偏光板の間に被検体をおいて眺めれば、水晶玉なら写真5のように見え、ガラス玉なら写真6のように見えるとありました。



写真5 水晶玉で見える文様

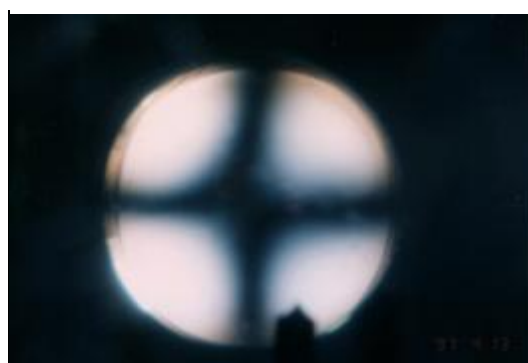


写真6 ガラス玉で見える文様

果たして、私は何ものか検定したい販売者が水晶玉という大きなきれいな球体と、ハワイのマウナケアで見つけた不思議なきれいな球体を持ったことになりました。そしてそれを検定する偏光板まで持ってしまったのです。それなりの値段で買った直径 10cm の水晶玉は完全な透明な球体で、それ自身、それなりに神々しいのです。マウナケア山頂で手に入れた水晶玉もどきものも完全に透明で、完全な球体ですが、大きさが直径 3cm 足らずです。神々しさはいうまでもなく大きなきれいな玉のほうです。下の写真7が両方の玉です。



写真7 大きな美しいガラス玉と小さな水晶玉「竜の涙」

左が、鑑定書付きの見事な水晶玉(?)で、大変きれいなもので、このようなものを使って占いをやるのも分かる気がします。

さて、この見分け方で両方の玉を調べてみたら、左の玉では、難なく見事にガラス玉で見えるという文様が見えました。ガラス玉だからどのように置いてもそのように見えるのです。そして右の小さな玉は、偏光板の間で何らかの文様を見るのは至難でした。右の玉を散々いろんな方向に向けてやっと写真のような模様が見え、それをはっきり見ることができたときには、色合いは違ったが水晶玉で見える模様が見えたのです。水晶は結晶体なので、その結晶の軸に視線を合わせるのが大変な作業だったわけです。

このようにしてハワイで見つけた水晶玉もどきものは水晶で、鑑定書付きで買った水晶玉はただのガラス玉でした。しかし、この直径 10cm のガラス玉が神々しいことには変わりはありません。そして、さらにマウナケアで手に入れた水晶球「竜の涙」がこの上なく大切なものになってしまいました。